

② キャリア探索行動を深めるには？

学生による外的活動と社会からの働きかけがカギ

キャリア探索行動の効果と、実践の難しさ

本誌では、就職活動中のキャリア探索行動の深まりが、進路選択における「自分らしさ」へとつながる可能性を示した。なお、キャリア探索行動については、入社後の組織適応に影響する(竹内・竹内, 2010)などの言及もある。

キャリア探索行動には、いくつかの尺度・解釈がある。安達は「就職活動が本格化する前段階にある学生にも実行が可能なキャリア探索を捉える尺度」(安達, 2019)を作成し、「自己探索」「環境探索」の2要素^{※1}、もしくは、「自己探索」「情報収集」「他者から学ぶ」の3要素による解釈(安達, 2008; 安達, 2010)を示した。大学生の進路決定・未決定を研究した若松は、「自己内省」「情報収集」「外的活動」の3要素による尺度を示した。「外的活動」として、学生が職業体験や会社説明会等を通して職業理解を深めることに注目している(若松, 2012)。

キャリア探索行動^{※2}が深まらないと、進路意思決定が困難になることも指摘されている(若松, 2020)。社会人Dさんのケース(本誌P13・16)は、キャリア探索行動が進まず進路選択に苦勞したケースにも見える。若松は、「自己内省」は最も手軽に進められるが、「情報収集」「外的活動」、とりわけ「外的活動」は進みにくいとしている(若松, 2012)。右図①からは、進路決定者、未決定者のいずれにおいても、自己内省とくらべて、情報収集、外的活動の頻度が少ないことがわかる。また、進路決定者は未決定者に比べて、探索行動の頻度が高い傾向が見て取れる。

自己内省についても、自分のライフイベント曲線を描いて眺めるような「自己完結的な分析」は進みやすいが、自己分析結果をもとに他者と対話したり、適性検査の結果を読み解いたりして自分を客観視する行為は進みにくい(若松, 2012)。自己完結型の「閉じた」自己探索は、「やりたいこと」を追求するために「自分探し」の迷宮に陥る危険(玄田, 2004等)や、消費意識ゆえに「もともと知っていた」企業・業種・職種にしか興味を持たず、探索の視野を狭くする(若松, 2012)ことにもつながる。

学生がキャリア探索行動を深めるには？

滋賀大学の若松氏は本誌のインタビューにおいて、学生が「閉じた」探索に陥らないために、外部刺激を利用しながら

らキャリア探索行動を深めるための方策を示している(P21コラム参照)。さらに、学生一人ひとりが自律的な探索をするために、学生の周りの大人(就職支援や採用に関わる人たち)による、「適正なスピードで就職活動を進めるためのペースメイク」「意思決定のヒントとなる問いかけ」「外部情報収集や他者との対話の仕方についてのナビゲート」といった働きかけの重要性を説いている。

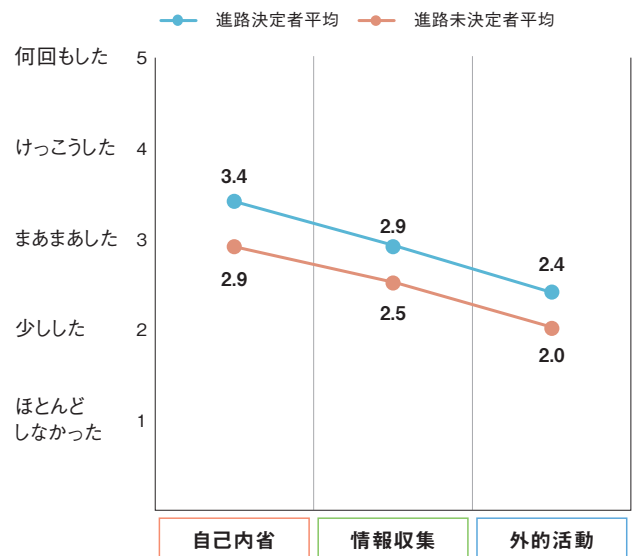
学生がキャリア探索行動を深めるために重要なことは、「漠然と他者との会話の機会を増やす」ことではないだろう。学生は他者との対話や他者の考えに触れる機会を通して、自己と職業に関する思考を深めることが重要であり、学生の周りの大人には、学生が思考を深めるプロセスに、適切に介入していくことが求められるだろう。

個人がキャリアを探索する過程には、個別対話以外にもさまざまな介入手法があり得る(Fretz, 1981)と言われてきた。より多くの学生に、就職活動を自分や社会と出会う「機会」と捉えてもらうための、働きかけの仕組みづくりが重要であろう。一方で学生にも、社会からの働きかけをうまく利用し、主体的なキャリア探索行動へとつなげていく姿勢が望まれるだろう。以降のページでは、いくつかの事例を見ながら、学生のキャリア探索行動を深めるための働きかけのあり方を考えていきたい。

学生

「情報収集」と「外部活動」は行われにくい

① 進路決定者と進路未決定者^{※3}の探索行動頻度比較



(若松, 2012より抜粋)

※3 進路未決定とは「未内定」ではなく「自分の進路を選択しきれていない状態」

※1 正確には「因子」。本誌では統計学の知識がない方にも向けた表記をしている

※2 若松は「進路探索行動」と表記している(若松, 2012)



学生のキャリア探索行動を促し、深めるには、 学生自身の外的活動と外部からの働きかけが重要

滋賀大学教育学部（教育心理学）
教授
若松 養亮氏

外の世界に触れながら少しずつ探索を続ける

学生の情報収集と外的活動が進みにくいのは、時間や手間がかかる割には、成果が実感しにくいからです。しかし、1日1時間でもWebで情報収集し続ければ、「(知らなかった)この業界の働き方は合っているかも」といった自己内省につながり、そこから情報収集の方向も絞られてきます。

情報収集は、「広く」と「深く」の繰り返しです。学生にはまず、総合就職情報サイトなどで職種・業界を「広く」見てみることを勧めます。気になった職種・業界を「深く」掘る。深掘りして違うなと思ったら、また「広く」見てみる。まずは個別企業に注目せず、職種・業界を知ることが大切です。自分が知っている範囲、自分のセンスで探索せず、就職活動や働くことの「リアル」を知ることが重要だからです。他者の仕事体験や職業に関する本を読んだり、友人や家族、OB・OGや企業の社員・人事などの「他者」と就職、働くこと、職種・業界について対話したりといった「外部刺激」を通じて、職業世界の「相場」を知ることが大事です。自分の思考も整理されるはずですよ。

消費者の立場で企業を見てきた学生は、就職活動においても有名企業やBtoC企業を見がちです。就職活動では消費者とは逆の立場、モノ・サービスを送り出す側の意識で、企業を見ることが重要です。消費者と逆の立場を意識するには、アルバイト、特に接客系のアルバイトが(学業に支障のない範囲で)おすすです。大学では出会いにくい、さまざまな年代・立場の人の考え方に触れられるためです。

自己内省に対する外部刺激としては、キャリア診断ツール(「就職レディネステスト」など)が有効です。敢えて「興味が持てない」という結果が出た職種・業種を深掘りするのも一案。視野が広がり、意外な発見につながります。インターンシップの体験も、「自分はルーティンワーク向きではない」という発見があれば、探索のヒントに生かれます。オンラインインターンシップも同様です。大事なのは、日頃接することがない「仕事」の世界を体験する機会をつくることです。

外部からの働きかけが学生の探索を促す

学生にとって、情報収集や外的活動のハードルが高いのも事実。学生一人で取り組んでいると、気後れる要素に遭遇し、取り組みが頓挫しがちです。周囲の働きかけも重要です。

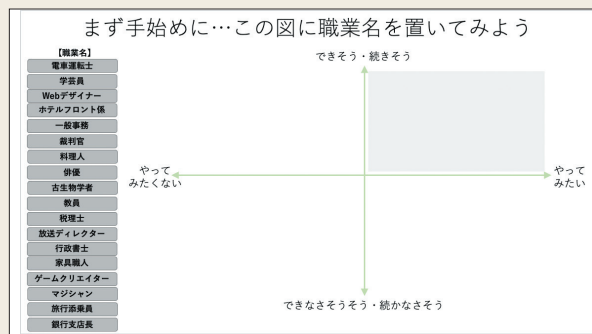
継続的に学生に関われるのであれば、継続的に面談し、「なぜ進路が決まらないか」といった問いを投げかけながら、「次ま

でに○○○○を調べてみよう」といったホームワークを与えるような介入が効果的です。調べてきたことをもとに話を進めると、本人も驚くほどスムーズな意思決定に至ることも多いです。情報収集は、方針が決まり、選択肢が減るほどに、効率が上がります(下村,1996)。なかなか一步を踏み出せない学生の背中を押し、その後も伴走する「水先案内人」的な働きかけによって、学生のキャリア探索行動を深めるような支援は可能です。

オンラインツールによる働きかけにも、可能性を感じます。ロールプレイングゲームのようなツールも良さそうです。ホームワークをこなすと「あなたはレベル〇に達しました」というメッセージとともに、次のホームワークが与えられるといったものです。双方向性があり、学生のモチベーション維持にもつながりそうです。AIチャット形式で、学生からの問いに答えていくサービスにも可能性を感じます。コロナ禍収束後も、オンライン活用の潮流は続くでしょう。オンラインを利用した働きかけのあり方は、今後の展開に期待したいです。

滋賀大学教育学部では、同大で教員養成課程を修了した現役教員による講話を必修科目の一部に組み込み、探索の一助としています。学生への働きかけは、大学OB・OGに限らず、企業関係者など「社会」のさまざまな人たちにもできることです。学生にも、社会からの働きかけに関心を持ってほしいですね。

Profile●主として滋賀大学教育学部学生を対象に、大学生の進路意思決定のメカニズムと、そこで妨害的に作用する諸要因の検討を行っている。著書に『大学生におけるキャリア選択の遅延』(風間書房)、『生涯発達理論と支援』(金子書房・共著)などがあがる。



若松氏のワークシートの例(一部改訂)。【キャリア探索の手順】①左の18の職業を座標軸に置いてみる。②「できそう・続きそう×やってみよう」の象限(右上)に置いた職業の共通点=「キャリア・アンカー(読れない価値観・欲求)」を見つける。③キャリア・アンカーに当てはまりそうな職業の情報収集や職業体験を通して、現実と突き合わせる。